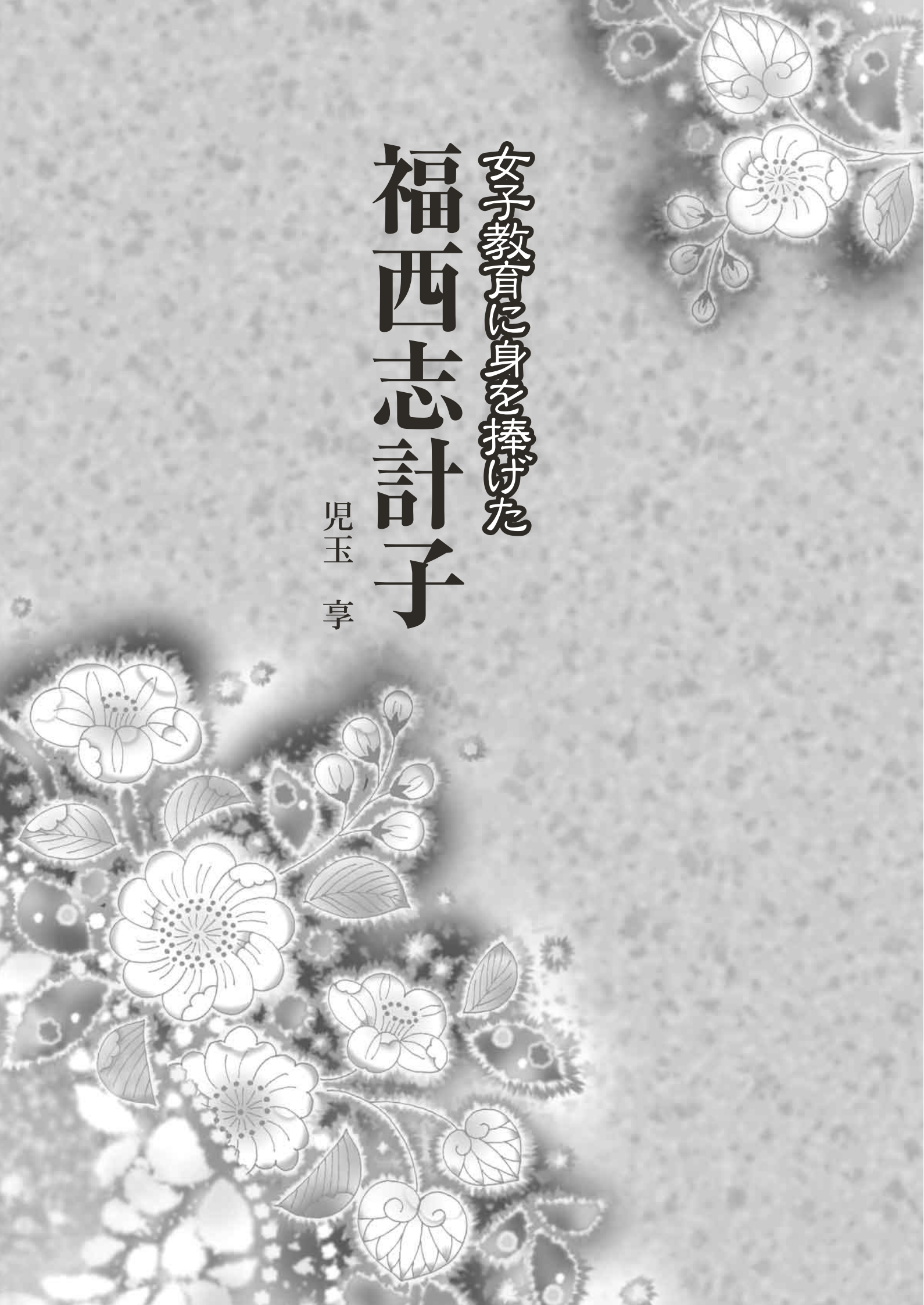


女子教育に身を捧げた

# 福西志計子

児玉 享



## 裁縫教師への道

福西志計子は高梁の御前町に生まれ、幕末から明治に活躍した。困苦勉勵のなかに県下で最初の女学校（当時全国に9校のみ）を創設し、その生涯を女性の自立と向上のために奮闘した。その尊い一生をたどっていききたい。

当時、松山藩は激動の時代を送っていた。困窮した



藩校・有終館の跡地に高梁小学校と女紅場があった

藩財政を建て直し、学問を発展させたのが山田方谷である。方谷は幼時より学問に励み、その優れた学力・人格を認められ、藩校である有終館の学頭（校長）になって藩士教育にあたるとともに、松山最初の私塾「牛麓舎」を創り、学問を目指して各地から集まる生徒を教えていた。

この塾の隣家に福西志計子は生まれた。父は福西郡左衛門（伊織）、母は飛天、弘化4（1847）年12月のことで、幼名は繁、後に志計、志計子と呼ばれた。志計子は隣家の塾生の句読の声を聞きながら大きくなり、山田方谷の教えを受けて学問への強い情熱を持つ子どもに育っていった。

7歳の時に父は亡くなり、母は彼女を実家の剣持家で育てたが、10年後の慶応2（1866）年、志計子に養子助五郎（井上泉平七男）を迎えて福西家を復活させた。助五郎は藩の産物



福西志計子

を扱う撫育方などを務め、明治初年には野山の百姓一揆の終息を岡山役所に報告した記録が残っている。「岡山県通史（下巻）」の松山藩の侍帳でみると、彼は準下士（下級士族）で米八石二人扶持、維新後米七石二斗とあり、一家の生活は厳しかった。

その上、明治初（1868）年の松山は岡山藩の支配下に入り、藩士は5、6月頃まで城下を明け渡して津川・高倉などで謹慎し、その後城下には戻ったが、元の家に帰るのは明治2（1869）年の9月、岡山藩の撤退後高梁藩として二万石で再建されてからである。藩が存続の危機に立たされたこの間、藩士

はどのような生活をしていたのであろうか。志計子は和裁の師匠などをして家計のやりくりをしていたと思われる。

「没後三十年に当たり福西先生を偲びて」によると、神崎竹代は「明治三年頃から長年、先生のお膝元で教えをうけ」た。また「先生は独立心のある意志の強い正義を行う人で、同情心、勇気のある愛にみちたお方でありました。またお手早といったら人の二人前、三人前もお仕事のできる人でした。時間を大切にされました。又先生は女子の覚醒という事を申され、女子教育が大切だといわれました」と書いています。やつと藩が再興されたと思つたら、明治4（1871）年廃藩置県となり、藩士は生活の手立てを探さなければ生きていけない大変な時代になった。

明治新政府は新国家建設のため次々に制度をつくり、明治5（1872）年

に学制を公布し、女子も男子同様に勉強ができるようになった。明治6（1873）年に有終館の跡地に高梁小学校が設置された。

明治8（1875）年志計子が29歳の時、10歳年長の木村静と一緒に岡山裁縫伝習所に入学した。木村静は木村忠蔵の長女として江戸に生まれた。19歳で本家に嫁ぎ、31歳で夫を失ったあと二女の養育に努めていた。

2人が学業を終えて帰った明治9（1876）年7月に、「女子教育普及ノタメ各郡二女紅場ヲ設置シ、年齢十四歳以上ノ婦女子ヲ入場セシメ、裁縫ヲ専修セシメ、傍ラ言語礼節身体動作の略節ヲ学バシム」との布達があり、10月高梁小学校に女紅場が付設された。2人はその教師として勤務するようになった。この女紅場は翌年高梁小学校付属裁縫所と改称する。



## 裁縫学校の設立

明治新政府は富国強兵策を図り、次々と統一政策を実施していった。身分制が廃されて、四民平等・職業選択の自由となったため、日本中が身を処す道を求めて競争する厳しい社会となっていた。高梁でも士族の多くは職を求めて東京や大阪に出、代わりに近隣の土地からの移住者が新しい職業に従事するなど、めまぐるしく変化していった。

福西志計子と木村静は明治9(1876)年から



裁縫学校設立地(順正女学校・発祥地)・向町

高梁小学校付属裁縫所に勤めていた。この頃から文明開化の時代を迎え、生活面でも西欧化が進み、明治5(1872)年12月3日を明治6(1873)年1月1日として欧米と同じ太陽暦を導入したが、農村では旧暦が併用された。西欧化は中央から地方へと進んだが、高梁は比較的早く取り入れ、明治13(1880)年の新島襄の妻への手紙でみると「山の中とは申せ、至つて繁華なる地なり、家数は千余もこれ有り、中々開化風にて、夜も所々ランプもつき、暗夜といえども差し支えはなし、牛乳もあれば牛肉もあり、書店もあり、格別の不自由のなき所」と紹介されている。

西欧文明と共に自由民権思想やキリスト教も入ってきた。明治12(1879)年初めて県議会議員の選挙が行われ、高梁から柴原宗助が選出された。「山陽新報」に「米国遣伝教師

ベリー氏及び中川横太郎、金森通倫の両氏は十月四日より三日間高梁裁縫校にて耶蘇教の説教を行いたまい、六日午後六時よりは開口社の演説あり、終りに岡山の谷川達海氏が国会開設論を演説せられたり」の記事が出ているが、これは柴原が自由民権運動を唱える中川横太郎とキリスト教牧師金森通倫を連れて帰り、風俗改良講演会を開いたものである。金森通倫はキリスト教を説き、その後、毎月キリスト教の伝道に訪れ、福西、木村の2人は初めてキリスト教に接した。

新島襄は明治13(1880)年2月17日から19日の3日間高梁に滞在、高梁小学校の裁縫所で1日目300人、2日目400人の聴衆を集め、別に婦人会で200人位の人に話をしてゐる。当時の高梁の人口は5000人位だから、町中こぞつての一大イベントになったと思われる。新



木村 静

島は人々に、我が国にとつては富国強兵よりも欧米のような文明国にすることが急務であり、文明の基を立てるためには信仰と教育が重要であると説いている。まず神を知り、敬い、恐れ、そして信じ、愛すること、これは人間にとつてもっとも大切なことであり、神の規律を守ることにより自由人となり、文明の民となることができる、と説く。教育の重要性と教育によつて人心改良に取り組むことこそが国を盛んにすることであり、特に婦人の会では女性の教育の重要性を説き、母親として自分の子を立派に育てるため、自由の心を持ち、見識と愛情をもった女性を育てることの大切さを説いた。

新島の教えは福西の教

育理念に合致していた。彼女は強く共感し、キリスト教に学び、風俗改良婦人会を組織して指導者として活動した。このような活動が町議会で問題となり、福西、木村両教師の活動への圧迫が強まった。ついに2人は明治14年7月に学校を辞職し、後援者の支持も得て、この年の12月10日向町の黒野宅を借りて、私立裁縫所を設立した。月謝は10銭〜20銭(100銭が1円)までとした。最初生徒は30人に達せず、生活、学校活動は厳しかったが、2人は信念をもつて突き進んだ。

この学校の後援者は主にキリスト教を信奉する人々で、柴原宗助(県会議員)、柳井重宣(実業家)、赤木蘇平(医師)、須藤英江(医師)、小林尚一郎(薬屋のち町長)、石川豊次郎(資産家)、清水質(教師、高梁市名誉市民・比庵の父)らで年間1000円、3年間援助している。

## 裁縫学校から 順正女学校へ

裁縫所で得ていた7円の月収で一家の家計を支えていた福西志計子、木村静は退職してからは、わずか2円を2人で分けるような苦難の時もあったという。彼女らがこのような道を選んだのも、信念に従って自由の境地で女子教育に尽くしたいという思いからであった。この時、志計子35歳、静45歳であった。

当時高梁では、男子には中等教育への動きがみられたが、女子には皆無だった。すなわち、男子には明治12(1879)年に有終館が再建されて、館長として莊田賤夫(霜溪)を招き、明治14(1881)年7月成羽町に川上中学校が、12月高梁町に上房中学校が開校し、上房中では吉田寛治(藍関)が小学校と掛け持ちで漢学を教えていた。女子に対する中等教育



志計子作の刺しゅう(高梁高校蔵)

同年秋には生徒は90人に達し、学校の基礎は固まっていた。

卒業生の山本充の回想文に、「熱心なクリスチャンたる師は授業の前に聖書の講義をなされて、精神的方面へ子女を導かれた為か、キリスト教反対者は勿論、町の多数の人は反対し迫害した。然し女傑とも言うべき福西先生はひたすら学校に力をお尽くしになり」と述べている。

この間、明治15(1882)年4月26日に高梁キリスト教会が16人で発足、福西、木村の2人も教会の有力メンバーとして活躍した。しかし、昔からの宗教・生活を守ろうとする人々は、新しい考えやキリスト教への反発から、

明治16・17(1883・84)年には教会に対し、激しい迫害事件を起こした。このような中においても、裁縫学校は動揺しなかった。

福西は、教養や徳性

を養うには裁縫などの授業だけでは不足と感じ、文学科の必要を痛感し、女学校を創ることを考えた。この思いを強くしたのは、明治16(1883)年に読んだマリー・ライオンの伝記であった。マリーは7歳で父を失った後、学問に励み、24歳で女子教育に熱心な学園に入学、卒業後13年間教師をするなかで、女子のための大学の創設を決意した。無関心や迫害と戦い、この計画に賛同する2・3人の紳士の資金援助を得て、40歳の時達成する。福西は自分の経歴、思いと重ね合わせて、神の啓示と感じ、女学校設立を決心した。



柴原宗助の胸像(高梁キリスト教会蔵)

明治17(1884)年8月、京都から高梁教会に応援伝道に来た同志社女学校の藤田愛爾校長の賛意と励まし、森本介石牧師や後援者の賛同も得て、岡山教会の金森通倫牧師に相談と依頼をした。金森牧師の熱心な努力により、当時地方では得がたい女性の文学教師、神戸英和女学校(現神戸女学院)の、原とも女史を先生として招くことに成功、彼女が12月に着任した。

ここに念願がかない、明治18(1885)年1月7日、県下最初の女学校として、裁縫科と文学科を持つ順正女学校が成立する。初代校長として、最初から後援を惜しまなかった柴原宗助が就任した。順正という校名は前述の吉田寛治の命名である。吉田は有終館で山田方谷に学び、江戸に遊学、高梁小学校の主任教諭となり、かつて福西・木村が上司として信頼していた先生である。



## 順正女学校の礎を築く

私立順正女学校は裁縫科と文学科をもって、明治18（1885）年1月、正式に創立された。教員が

文学科創設に大いに協力したので、教会との関係は以前にも増して深まったため、町民の中には「伝道学校」と非難する人もいた。しかし、援助なしには私立の女学校を運営することは困難で、教会員の支援は、かけがえのないものであった。福西にとつて信仰は活動の原動力であり、



当時まだ珍しい洋装の福西

キリスト教の精神によって学校を経営したが、学業と信仰は別で、生徒に信仰を強要することはなく、生徒のなかで信徒になった人は少なかった。

順正女学校に続いて、明治19（1886）年に私立岡山女学校（現清心女子）、私立山陽英和女学校（現山陽女子）が創設されているが、いずれもキリスト教の持つ、女子教育重視・自由の理念に基づいている。

初代の柴原宗助校長は明治19年に辞職して京都に移り、二代目として柳井重宣校長が就任する。彼も

最初からの後援者であり、クリスチャンである。家業であった大高檀紙の製造は父の代で終わり、松山戸長、明治17（1884）年から県議会議員をしており、畜産業で活躍した実業家で、地域の発展に尽力した信望の厚い人であった。

当時、筒袖、袴に革靴の時代から、洋装時代に移ろうとしていた。県下でも明治17年には岡山中学校が制服として洋服を導入し、19、20年から下道郡、上道郡の男子教師は洋服着用が決められた。こうした時代に対応するため、福西は明治20（1887）年単身上京して神田職業学校に学び、洋服の仕立て、西洋洗濯、毛糸編み物、造花、手芸などの技術を修得し、翌年帰郷し、高梁に初めてミシンをもたらししている。こうして新しい時代に応じた教育内容が導入され、順正女学校の名は高梁の名前とともに、遠い所まで響き渡った。

教育内容の充実につれて生徒が多くなって、新校舎建設の願いが高まっていた。順正女学校の成立時から、厳しい財政を救うため1銭講が始められ、明治39（1906）年まで続いて行われている。また明治23（1890）年後半より木曜日会が生まれた。これはキリスト教信者の教師が校舎の新築を願う祈りの会で、その熱意は協力者を動かし、明治26（1893）年10月6日に第一回の新築相談会が開かれた。そこで募金を呼びかける新築趣意書が作られ福西、木村静のほか、板倉信古、柳井重宣、石川豊次郎、横屋幸完、蓑内鉦一郎、東三省など54人の新築委員が選ばれた。

順正女学校新築趣意書を要約して紹介すると――

「過去7、8年間の我が国の女学校は欧米の模倣の傾向があり、学は高遠で、芸は浮華に流れ、日本婦人特有の優美、貞淑を忘

れている。そのためこの2、3年来、女学校は衰微しているが、女子教育はないがしろにすべきでなく、学を以って知を研ぎ、徳を修め、技芸で身を立て、家を保つことを目的とし、良妻賢母を得る教育は国家の急務である。順正女学校はこの主義を採り、明治14（1881）年7月より明治27（1894）年に至る13年間、全国で幾多女学校が興廃するなか、益々榮え、その教育は社会に適し、卒業生は人の師、良妻となる。今我が校百数十人の生徒を有し、教場狭く、これ以上生徒を入れる余地がない。今回校舎新築を企図している。我が校の主義に賛成し、この計画の賛助を願う」

この呼びかけ以後、福西は以前にも増して寸暇を惜しんで東奔西走し、新築委員をはじめ高梁町民の協力によって、約3000円の寄付金を集めることができた。

## 順正女学校の発展

新校舎建設は福西志計子の長年の夢で、一生をかけての大事業であった。彼女は一貫して校長とはならず、校長は古木虎三郎牧師、寺沢精一牧師を経て、

明治26(1893)年以後、

頼久寺町14番地に土地を得て、裁縫科と文学科の教室を備えた新校舎が明治28年(1895)3月に起工され、11月完成した。早速、向町の校舎から移転して授業が始まり、翌29年3月28日、盛大な移転式が行われた。4月からは寄宿



順正女学校創建碑(三島中洲撰)

裁縫教師および舎監を担ってもらった。彼女は1期生で、神戸英和学校(現神戸女学院)に進学、卒業後、その教師をしていた人である。福西は高梁に帰ると、教えた

舎の工事が始まり、9月には竣工した。福西はその玄関前に立ち、「どうしてこれが出来たのでしょうか。全く不思議でありません。実に神様の御恵みと人様の情けです」と、感謝と歡喜に満たされて涙を流した(伊吹岩五郎談)。

しかし、新校舎建設の努力は、大柄で病気を知らなかった福西の身体をむしばんだのか、明治29(1896)年の夏には体調が悪化、糖尿病といわれていたが、のち肺を病み、30年1月から岡山で、5月からは児島の田之口で、各2カ月間養生をした。このため河合久を招き、福西の代りに学校経営、



順正女学校新校舎  
(県指定重要文化財順正寮跡)

のち明治31(1898)

年11月から30余年にわたり順正女学校の校長として発展に尽くした伊吹岩五郎は「福西志計子は時代の生みたる女性であります。世人に対する所は男性的ですが、一面女性としての美点を持っています」と述べている。キリスト教の愛の心と人に対する優しさを強く持つていて、家庭では母と夫に愛を以て仕えている。子どもに恵まれなかったの

で、留岡幸助を同志社に送り、山室軍平を助けている。石井十次の妻品子は順正女学校で学び、留岡幸助の

最初の妻、夏は苦学生として順正で働きながら学んだ。後妻になっ

たきくも苦学生として病人の看護の仕事をし、時に福西の看護もし、彼女の苦心談も聞き、子どものように愛され、労わられた。クリスマスとなった後、「1カ月5銭の教会費に困ると、わざわざ髪を掃除させて、出して貰った」という。

この間、福西の心の中の

なるとほとんど病床で過ごすことになり、伊吹岩五郎牧師は終わりの3カ月間、毎日のように病床に見舞い、励ました。学校の将来を思い焦燥感に悩んでいた福西に、伊吹は新約聖書、第二コリント12章9節を示した。

主は「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われた。

福西は「私のなすだけは為した。後は神様の働きがあります。何も憂うことはありません」と言い、以後の先生は精神的に別人でし

たと伊吹は語っている。福西志計子は明治31(1898)年8月21日、午後7時半、家族・門下生、多数見守るなか、平安で満ち足りた顔で、波乱の一生を生ききって、52歳で地上生涯を閉じた。共に働いた木村静は後を追うように、33年2月11日64歳で天に召され、2人は同じ教会墓地に静かに眠っている。

この冊子は、高梁市の広報紙「広報たかはし」(平成20年12月号～平成21年4月号)に連載されたものです。

発 行 高梁市教育委員会  
高梁市落合町近似286-1